全カリ Newsletter No. 46
2019.10.10
立教大学全学共通カリキュラム運営センター

全カリ部長に就任して

全学共通カリキュラム運営センター部長／社会学部教授　井川 充雄

2019年4月より、全カリ部長に就任した井川と申します。就任して約半年が経ちましたが、ここにご挨拶を兼ねて、若干の感想や考えを述べさせていただきます。

私が、立教大学社会学部に赴任したのは2007年のことで、はや12年が経ちました。メディア社会学、メディア史を専門としています。赴任した年度に初めて全カリ科目（現全学共通科目）の「主題別科目」という区分を担当した際には、学部も学年も異なる学生、それも400人を超える履修者に大変戸惑ったのを、今でもよく覚えています。その後も何度か全カリ科目を担当しましたが、学部専門科目のように、その分野に関する知識がある程度共通している学生とは違い、多様な専門を学ぶ学生に興味や関心を持ってもらいながら授業を進めることに苦労しながら、自分なりの工夫を重ねてきました。また、新座での授業も、移動の負担はあるものの、ふだん接することの少ない学部の学生を対象に授業できることは利点でもあるように思いました。いずれにせよ、全カリ科目を担当することによって、自分の授業の内容や授業の方法について多くのことを教えられてきたように思います。

他方で、これまで全カリ関係の委員などを務めたことがなく、今回、全カリ部長に就任したことで、全カリというものについてあらためて学びながら、ここまでやってきました。

そうしたことから見えてきたことがあります。全国の大学と同じく、いわゆる「大学設置基準の大綱化」の荒波を受け、立教大学でも一般教育部が1995年に廃止され、それに代わって、全カリが生まれました。立教における全カリの設置を準備され、初期の全カリの運営に尽力された寺崎昌男先生等がまとめられた、立教大学全カリの記録編集委員会編著『立教大学「全カリ」のすべて：リベラル・アーツの再構築』（東信堂、2001年）などを読むと、当時のリベラル・アーツ教育に対するひとかたならない情熱を見ることができます。そこには一般教育部時代の理念を継承しつつ、新しい時代に合ったものを作り出していこうとする思いが込められています。

全カリが生まれ、20年以上が経ちましたが、立教の全カリは、これまで他大学からも高い評価を得てきました。しかし、年数を経るにつれ、学内における全カリの役割や意義についての認識、リベラル・アーツ教育に対する情熱は、薄らいできてしまっているのではないかと感じます。私もそうでしたが、教員は専門科目の担当者として各学部に採用されるため、どうしても全カリ科目の担当は二の次になりがちですし、場合によっては負担に感じることもあります。そのため、毎年、担当者を見つけるのに苦労している現状があります。総合系科目における専任教員の担当率も、以前に比べると、残念ながら低くなっています。

しかし、2019年度の開講コマ数は、言語系で3088コマ、総合系で704コマに達します。学生から見れば、卒業要件単位124単位（理学部数学科では128単位）のうち28単位を全カリが占め、決して低い比率ではありません。

こうした中、グローバル化をはじめとする今日の様々な教育上の課題にどう答え、「専門性に立つ教養人の育成」という学士課程の教育目的をどう実現していくか、今一度、全学で認識を共有し、今後のあり方を考える時期に来ているように思います。そのために、教員、職員、学生の皆さんのご協力をあらためてお願いする所存です。

TOPICS ２０２０年度から始まる新しい英語教育カリキュラムについて

英語教育研究室

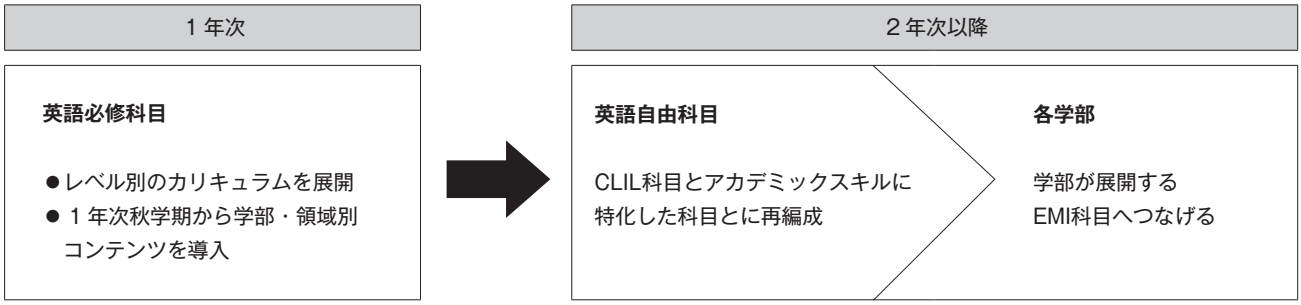
２０１６年度に始まった現行カリキュラムでは、２０１０年度に導入した発信力養成の重視と少人数クラスを特長としたカリキュラムの方針や枠組みは維持しつつ、発信力と受信力、英語４技能のバランスを考慮して、英語必修科目に「英語リーディング＆ライティング」や「上級英語」を新設するなど､幾つかの変更を加えた。このように、１９９７年度に全学共通カリキュラムがスタートして以来、学生のニーズに応えるため、また現代社会に求められる能力の変化にあわせ、英語教育カリキュラムの見直しを数回実施してきたが、現行のカリキュラムが構想されてから10余年が経過し、その後、国際化・グローバル化が様々なレベルで進展してきた。なかでも、英語教育改革は政府・文部科学省によって強力に推進され、小学校５年生からの教科化、バランスのとれた英語４技能教育の推進と、これを後押しするための大学入学者選抜改革が進められている。このような変化に合わせ、本学に入学する学生の英語運用能力や学びに対する意識も変容することが予測され、これに充分に対応可能なカリキュラムを用意する必要がある。以上の理由から、２０２４年度を完成年度とし、２０２０年度より、現行カリキュラムの長所を活かしながら、新しいカリキュラムを段階的に展開していくことになった。

新しいカリキュラムのポイント

- **４年間を通じた継続的な英語学修を実現する。必修科目/１年次の段階から各学部の専門領域に関する内容を緩やかに取り込み、自由科目でCLIL科目を展開し、各学部との接続を実現する。**
- **２０２０年度から「英語ディスカッション」は１年間の内容を半年に凝縮した上で春学期に開講し、クラスサイズを１０名程度に変更する。秋学期には新たに「英語ディベート」を２０名程度で展開する。**
- **２０２０年度から「英語 eラーニング」は春学期履修に変更し、TOEIC テストのスコア伸長を図る内容とする。**

１. 新しいカリキュラムの全体像

新たな英語教育カリキュラムでは、各学部の教育目標と合致する形で、全学共通必修科目からCLIL（内容言語統合型学習、Content and Language Integrated Learning）科目を経て、各学部が展開するEMI科目（英語で教授する専門科目、English as a Medium of Instruction）へと繋ぐ、４年間を通じた継続的な学修を２０２４年度までに実現することを目標とする。これまでのカリキュラムでは「全学共通」であることに力点が置かれ、どの学部のクラスであっても共通のシラバス、テキスト、素材を用いた授業を行っていた。しかし、各学部・学科の学位授与の方針、教育課程編成の方針に記載されている「自分の専門領域の内容を英語で学ぶ基礎が身につく」を実現していくためには、学部ごとに異なる専門領域との接続を意識して、かつ各学部の協力を得ながら、カリキュラムを具体化していかなければいけない。そこで、新しいカリキュラムでは、１年次の必修科目から可能な範囲で専門領域に近いテーマを扱い始め、自由科目でCLIL科目を展開し、各学部との接続を実現していく。その後、各学部・学科の専門科目として展開されるEMI科目の履修を経て、４年間を通じた継続的な学修を推奨するだけでなく、幅広いレベルの学生に対し、各レベルに応じた継続学習を促すことができるのが特長である。



2.2020年度からの英語必修カリキュラムの変更点について

（1）「英語ディスカッション」の変更および「英語ディベート」の新設

2020年度から、現行では春学期・秋学期に週1コマずつ1クラス8名程度で展開している「英語ディスカッション」（以下、英語Dという）を春学期のみの展開、またクラスサイズを10名程度に変更し、秋学期には新たに「英語ディベート」を1クラス20名程度で展開する。文科省をはじめ他大学や高校からも高い評価や関心を受けてきた英語Dでは、スピーキングの流暢さの向上に重きを置いているが、これに加え、秋学期の「英語ディベート」を通して、論理的思考力・批判的思考力・スピーチ力・情報収集力などのスキル習得を目指す。また、レベルの高いクラスでは、学部の専門領域に関連するテーマでのディスカッションやディベートといった、CLIL科目やEMI 科目への接続を意識した内容を盛り込んでいく。その他、2020年度から夏期（8月）および冬期（2月）に実施していた英語Dの再履修は廃止となり、必修科目の不足単位はすべて英語単位認定試験、もしくは英語再履修クラス「英語R」で修得することとなる。

（2）「英語eラーニング」

現在、「英語eラーニング」（以下、英語eという）は1クラス80～160名で実施されている。授業は毎週PC教室で行われ、基本的に1クラスを複数のPC教室に分けて着席させ、教員とSAで各教室を担当する形で行われている。一方、PC 教室の座席数に制約もあり、学生は春学期か秋学期のどちらかに英語eを履修することとなっている。こうした現行の英語eは、2つの課題を抱えている。まず、学生によって英語e（と「英語プレゼンテーション」）を学ぶ順序が異なることである。1年次秋学期からRIKKYO Learning Style における形成期となるが、形成期開始時点で、学生群によって学びの差が生じているという課題を抱えている。このことは、英語による専門科目を積極的に導入している学部や、留学に向けての準備を進めている学生においてとりわけ影響が大きいと受け止めている。次に、インターネットに接続できる環境であれば、時間と場所の制約を受けることなく学習できるeラーニングを、毎週決められた時間に決められた場所で行っていることである。PC教室における毎週の一斉授業は、学習者一人ひとりが自らの得手・不得手を確認しながら、自律的な英語学習者になることを目指す英語eの目的を達成する上で必ずしも最善の授業形式とは言えない。そこで2020年度からの英語eでは、これらの課題を解決することを念頭に、学生全員が春学期に英語eを履修することにした。また、学びの目的を明確にするため、内容をTOEICテストのスコア伸長を図るものに改めることにした。さらに、教室での学びと自宅等でのeラーニングのバランスを見直し、PC教室における毎週の一斉授業を前提としない形で科目を展開していく。

（通常クラス）

2016-2019年度までの1年次必修科目	
春学期	秋学期
英語ディスカッション1【1単位】	英語ディスカッション2【1単位】
英語リーディング＆ライティング1【1単位】	英語リーディング＆ライティング2【1単位】
英語プレゼンテーションまたは英語eラーニング【1単位】	英語プレゼンテーションまたは英語eラーニング【1単位】

→

2020年度からの1年次必修科目	
春学期	秋学期
英語ディスカッション【1単位】	英語ディベート【1単位】
英語リーディング＆ライティング1【1単位】	英語リーディング＆ライティング2【1単位】
英語eラーニング【1単位】	英語プレゼンテーション【1単位】

（上級クラス）

2016-2019年度までの1年次必修科目	
春学期	秋学期
英語ディスカッション1【1単位】	英語ディスカッション2【1単位】
上級英語1（リーディング＆ライティング）【2単位】	上級英語2（プロジェクト英語）【2単位】

→

2020年度からの1年次必修科目	
春学期	秋学期
英語ディスカッション【1単位】	英語ディベート【1単位】
上級英語1（リーディング＆ライティング）【2単位】	上級英語2（プロジェクト英語）【2単位】

授業探訪

２０１９年度　総合系科目・多彩な学び「建築と文化」

担当：服部 佐智子（兼任講師）

授業の概要や特色

全学共通科目「多彩な学び」に位置付けられている「建築と文化」は、古代から近代における各時代の建築や都市の特徴とその変容過程を通して、日本の社会・文化および異文化との交流について考える力を涵養することを目標としている。 その内容は、前半では住宅を中心に日本人の生活と暮らしについて学び、後半では都市施設へと視野を広げ、日本の建築や都市の特徴やその変遷と、そこで生きていた人々の生活・文化を学ぶものである。

工夫していること

今回は「学生の能動的･発展的な学習の促進」に焦点を当て、私自身が実践していることを紹介させていただく。例年１３０～１５０人前後の受講者で講義形式ということもあり、学生による授業評価アンケートでも評価が低くなりがちな学生の能動的・発展的な学習を促すべく、昨年度からレポート提出を課すこととした。具体的には、学生の興味や事情に合わせて選択できるよう、各回の授業内容に即した関連論文の要約＋論評レポートもしくは野外博物館・建築関連展覧会等の見学課題レポートについて、２回以上の提出を課した。

その結果、アンケート設問項目の「授業時以外に学習した時間」が長くなり、「自分で調べ、考える姿勢」の評価も上がり、アンケートのコメントには､「中間レポートで課外調査があった点　発展的な学習ができました。」「専門的な知識まで得ることができたので、この授業を受けて良かったと思います。」「建築を勉強するうえで参考になる興味深い展覧会や施設を紹介してくださったことで、発展的に学ぶ意欲が高まりました。」という評価を得て、発展的な学習のきっかけとなり得たと感じた。

また、全学年が受講しているため、学生の知識や興味の差が生まれやすいことを考慮し、各回の授業内容を詰め込み過ぎるのではなく、より学生の理解度を高める工夫を行った。各授業前後ブラックボードに関連論文や授業で取り上げる資料のうちインターネット上で閲覧できるデジタル化された資料等のURLをアップロードし、学生の能力・興味に合わせて、論文や資料を気軽に手に取れるよう整備することにより、学生の自主的に学ぶ姿勢がより積極的になったと考えられる。実際、毎回授業後に提出してもらっているリアクションペーパーを読んでいると、中間レポートとは関係なく、学生たちが興味のある授業内容や気になった事柄について関連論文を読んで、より発展的な学習に繋げてくれていることが読み取れる内容がみられた。

以上、自分なりに授業にて実践している点をまとめたものの、「自分で調べ、考える姿勢」の評価は依然として高評価とは言い難い。アンケートに「身近であるが見えていなかった、気付いていなかったような建築のことを知ることができて良かったです。」と書いてくれた学生がいたが、このような学生が増えるよう、建築専門外の学生たちが建築を身近なものとして認識し、建築を通して日本文化を考える力を養成できる授業の工夫を重ねていきたい。また、日本建築や都市の歴史を通して日本の文化を学ぶ講義であるため、歴史に重点を置いた講義内容となっているが、建築や都市の現代的トピックスも取り扱うことで、学生が学問的興味を持ちやすい話題の提供や身近な問題として捉えられるよう、内容の改善に努めていきたいと考えている。

今回、「授業探訪」の依頼を受け、躊躇いがあったもののお引き受けしたのは、経験の浅い若輩者の私だからこそ授業内容を紹介させていただくことで、より良い授業へ改善するきっかけにできればと思ったためである。

授業探訪

２０１９年度　言語系科目・言語自由科目「English Intensive」

担当：芳賀 サチエ（ランゲージセンター教育講師）

Autumn semester has begun and now many of you are thinking about your plans for next year.
Will you study abroad? Would you like to take classes that advance practical skills to prepare you for when you begin work? Or perhaps you would like to find a class where you can learn about the world more?
As you already know Rikkyo University's mission is to develop Global Leaders. If you are interested in further developing your global outlook and English studies after completing your first year required courses, then "English Intensive" is the program for you!

Characteristics:

- Small Class sizes（Up to 25 students）→ Develop deep relationships with classmates.
- Meet twice a week → Lots of opportunity to discuss and think deeply about topics.
- Classmates have similar interest and motivation → Positive and warm environment where everyone encourages each other to do their best work.
- Discussion and/or project based → Enjoy learning about new topics & hear a variety of different opinions.
- 21st Century Skills → Ask your own questions and cover topics that have many possible perspectives which reflect real life where this isn't only one correct answer.

There are four intensive courses:

＜Spring Term＞

English Intensive A : Global World - discuss current global issues deeply, such as international politics and environmental destruction. Students learn how to think critically and articulate their opinions about these issues through group work, discussions and presentations.

English Intensive B : Academic Language Skills - prepares students with the academic skills needed for study abroad. For example, academic writing, listening, presentation and notetaking. Students explore a variety of academic lecture content to develop their academic English skills.

＜Fall Term＞

English Intensive C : Integrated Language Skills - develops communication and language skills through a variety of topics that will help students doing work（volunteer or paid), study, and/or social activities in international settings.

English Intensive D : Intercultural Understanding - reflects upon the diversity of world cultures and explores issues that arise out of interaction between cultures. This class learns about world cultures more deeply and thinks critically about the concepts of internationalization, cultural assimilation and strategies to manage communication across different cultures.

Comments from students：

"Through thinking deeply about social issues, I was able to understand a lot of global social issues connected to our Japan."（Momoka, 2nd year student）

"In this class, I could develop many skills. These skills will be helpful when I talk with foreigners. Now that Japan is globalized, we have to focus on social issues and have our own opinion. In the future, I want to be a person who can consider social issues logically and have a persuasive opinion. I learned to attract people with hook, phrase and structure of presentation."（Shumpei, 3rd year student）

"Through many short discussions and long discussions, I gained confidence in my opinions. Now I can speak my idea openly."（Ayumi, 2nd year student）

授業探訪

２０１９年度　言語系科目・言語自由科目「フランス語スタンダード2」

担当：小倉 和子（異文化コミュニケーション学部教授）

フランス語教育研究室では、１年次の必修を終えたばかりの学生を対象とした「フランス語中級１・２」と「フランス語スタンダード１～４」を運営している。「中級」はネイティヴと日本人の教員が１回ずつ担当し、週２回開講している。また、研究室が中心になって開発した教科書『フランスの今』を使用しながら４技能がバランスよく身につくような設計となっている。一方、「スタンダード」のほうは週１回の開講で、１（春）と３（秋）はネイティヴ教員、２（春）と４（秋）は日本人教員が担当し、１～４全てを履修すると、「中級」を履修したのと同等の能力が身につくようになっている。ただし、「中級」と「スタンダード」で使用する教科書は異なるので、春学期に両科目を同時履修して秋からの留学に備える学生も少なくない。以下、筆者が今年度春学期に担当した「スタンダード２」を中心に紹介したい。

この授業では、１年次に学んだ文法・語彙・表現などを復習しながら、十分な時間が割けなかった長文読解の訓練をすることと、仏検の受験対策に取り組むことが２本の柱になっている。文法の復習と長文読解については『フランス語圏の社会と文化』が指定教科書として使用されている。フランス語教育はフランス（それもパリ）の方を向きがちだ、という批判をしばしば耳にするが、この教科書はヨーロッパ、北米、カリブ海、アフリカ、アジア、オセアニアなどに広がるフランス語圏の社会（歴史を含む）や文化に目を向けている興味深い教材である。言葉を学ぶだけでなく、コンテンツとしても、学生たちが中級～上級と継続学習していくなかで、フランス語を使って何をしようとしているのか、したいのかを自らに問うきっかけになる。各課丸々１ページの長文を読解して授業に臨むのは１年次の必修を終えたばかりの学習者にとって決して簡単な作業ではないが、受講者たちはよく準備してきてくれていた。仏検対策の方は毎回４～３級の過去問を解きながら、解説し、関連する語彙や表現を学習した。

授業を担当して感じたことは、２年次になってもフランス語の発音に自信のない学生が少なくないということである。フランス語は綴りと発音の関係が規則的で、例外は少ないが、残念ながらローマ字式に発音しても通じない。通常、教科書にはCDがついていて、最近ではスマートフォンに音源をダウンロードできるものも増えているが、聴覚より視覚に頼ってしまう学習者が多い。言葉はやはり最初は音であり、リズムであるという原点に立ち戻りたいものである。したがって授業では、長文の意味を理解するだけでなく、（ネイティヴ並みでなくてもよいから）「正しく」発音できるようになることも心がけた。

今後の課題としては、学部も学年も異なる学生たちが集まったクラスで、互いの学びを助け合えるようになることが挙げられる。担当教員と一人一人の学生とのやりとりが多くなりがちな授業だが、学生同士が協働できれば継続学習に不可欠な自律性の獲得にもつながるのではないだろうか。

「フランス語スタンダード２」を履修した感想

文学部史学科2年次　村松 涼太

私は昨年、必修科目であるフランス語基礎１・２を履修して、クラスの人たちと会話の練習をしたり、一緒に練習問題を解いたりしていくうちに、フランス語を勉強することがとても楽しくなり、自ら進んで予習や発展的な勉強をするようになりました。そこで、私は引き続き、フランス語を勉強し、さらなる運用能力を身につけたいと思い、今年、言語自由科目「フランス語スタンダード２」を履修することにしました。授業ではフランス語圏の文化や歴史に関する少し長い文章を読み、訳の確認や文法の復習をして、文章の内容に関する問題を解いて理解を深めることで、フランス語の知識だけではなく、フランス語圏地域の歴史や社会も学ぶことができました。また、仏検対策の時間も設けられていたので、実際に受験するにあたり、とても参考になりました。

【大学教育学会第４１回大会参加報告】

（２０１９年6月1日（土）～6月2日（日）於：玉川大学）

教務部全学共通カリキュラム事務室　小島 緑

今年度のテーマは「高大接続改革と大学教育」。今回も興味深い発表が目白押しであった。

１日目は高大連携・高大接続の部会に参加した。入学前教育の報告が多かった。追手門学院大学は早期合格が決定した入学予定者の大学に対する不安を和らげるため、2012年度から入学前に１日研修を実施しており、2015年度から在学生をスタッフに起用、2016年度からは学生主導型プログラムへ移行している。１日研修のために学生スタッフが受ける事前研修は３か月にわたる。受講者アンケートでは、満足感や達成感を得たとする回答が全体の約９割であり、不安を和らげる効果が認められる。また、入学後の成績分析では、プログラム対象者の中で参加者の方が欠席者よりもGPA平均が高いという結果も出ている。さらに学生スタッフへのアンケートでは、研修等を通して帰属意識が高まったとの結果が出ている。１学年約５千人という本学の規模では、こうした取り組みを全ての学部で同じように導入することは難しいが、立教に合った形で在学生・新入生の関わり方を設計できれば、双方に好影響を与えることができるのではないかと思われた。

翌日はアカデミック・アドバイジングに関するラウンドテーブルに参加した。教員・職員・専門職・そして管理職（副学長）の立場からアドバイジングについての発表を聞くことができ、非常に有意義であった。討論のなかで、自ら積極的にアドバイジングを受けに来る学生や、教員に指示されて受けに来る学生は対応できても、その中間の学生（ミドル層）をサポートできていないという意見があった。個人的には、ミドル層は卒業まで自分で何とかできる層ではないかと考えていたが、「放っておいても就職できるが奨学金を返せる職に就けるとは限らない、そのリスクが最も高いのがミドル層である」という発言を聞き、卒業するまでではなく、その先を見据えたアドバイジングが必要なのだということを痛感した。

早期入学の決定や、いわゆる不本意入学など様々な要因により、学生のモチベーションのばらつきが大きくなっているように感じる。そんな学生らのモチベーションを上げ、学生が大学生活を振り返った時に成長や変化を感じることができるようなサポート、アドバイジングが教職員双方に求められている。学生を支えるきっかけは日常業務のいたるところにある。筆者は日頃学生と対面する機会は少ないが、自らの働きを通して、少しでも貢献できるように努めたいと気持ちを新たにした。

教務部全学共通カリキュラム事務室　丹羽 祥太郎

今大会では、ライティング（レポート作成）に関する研究発表を中心に聞き、アウトプットを通じて学生の主体性を伸ばすことの重要性を改めて認識する機会となった。

大学では知識をインプットする機会に比べ、身につけた知識をもとにアウトプットして表現力を磨く機会が少ない。その中で、レポートを書くという行為は、自ら問い（テーマ）を立てて自分なりの解決策を表現する重要な場でもあるため、積極的にレポートを書いてみるという体験の重要性を改めて感じた。

また、表現したものを他者と共有し、意見を交わし、新しい視点を得ることも重要である。研究発表の中で、今の学生は他者に対して評価すること・されることを嫌う傾向にあるという結果も挙げられた。否定的な意見を受けることは辛いものであるが、自分の考えや表現を他者と共有することで、新しい視点を発見でき、それが今まで自分に認識できていなかった課題を発見する力に繋がり、共に課題を解決していくための一歩になる。

これらの能力は社会でも活用できる。そして、これを伸ばしていける機会を増やすために、近年ではアクティブラーニングの手法を用いた様々な取り組みが行われており、これを通じて、学生が能動的に学び、表現力を身につけていく。もっとも、アクティブラーニングはあくまでも１つの学習方法であって、学生に何を伝え、学生は何を得たかが重要である。その学びから得たキーワードを、学生が主体的に興味を持ち、発展的な学習へとつながるように工夫をしていただいている先生方も数多くいる。

大学での学習を通じて、学生自らが興味を持ったテーマとアクティブラーニングを通じて身につけた能力を応用し、社会でも活用できるように学びの環境を整えることは重要であり、そのような視点を、私自身も持ち続けなければならないと考えた２日間であった。

2019年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2019年10月現在

全カリ委員会

役職名	氏名	所属		
部長	井川 充雄	社	メ	
副部長	浅妻 章如	法	国ビ	
チームリーダー	細井 尚子	異	異	言語チーム
	松山 伸一	理	生命	総合チーム
運営センター委員	西原 廉太	文	キリ	文学部長
	内野 一樹	済	会	経済学部長
	枝元 一之	理	化	理学部長
	水上 徹男	社	現	社会学部長
	松田 宏一郎	法	政	法学部長
	橋本 俊哉	観	観	観光学部長
	三本松 政之	福	コ政	コミュニティ福祉学部長
	山口 和範	営	営	経営学部長
	江川 隆男	現	映	現代心理学部長
	濱崎 桂子	異	異	異文化コミュニケーション学部長
	東條 吉純	法	国ビ	教務部長

言語系科目構想・運営チーム

役職名	氏名	所属		担当
リーダー	細井 尚子	異	異	
メンバー	師岡 淳也	異	異	英語
	新野 守広	異	異	ドイツ語
	石川 文也	異	異	フランス語
	飯島 みどり	異	異	スペイン語
	細井 尚子	異	異	中国語
	石坂 浩一	異	異	朝鮮語
	細井 尚子	異	異	諸言語

言語教育研究室

研究室名		氏名	所属	
英語	主任	師岡 淳也	異	異
		Caprio, Mark E.	異	異
		Cousins,Steven D.	異	異
		河合 優子	異	異
		Martin, Ron	異	異
		森 聡美	異	異
		灘光 洋子	異	異
		佐竹 晶子	異	異
		髙橋 里美	異	異
		高山 一郎	異	異
		武田 珂代子	異	異
		山口 まり子	異	異
		新多 了	外国語教育研究センター	
		芝垣 亮介	外国語教育研究センター	
		三浦 愛香	外国語教育研究センター	
ドイツ語	主任	新野 守広	異	異
		濱崎 桂子	異	異
フランス語	主任	石川 文也	異	異
		中川 理	異	異
		小倉 和子	異	異
スペイン語	主任	飯島 みどり	異	異
		佐藤 邦彦	異	異
中国語	主任	細井 尚子※1	異	異
朝鮮語	主任	石坂 浩一	異	異
		イ ヒャンジン	異	異
諸言語	主任	細井 尚子※1	異	異

※1 言語チームリーダーとの兼務

総合系科目構想・運営チーム

役職名	氏名	所属		担当
リーダー	松山 伸一	理	生命	
メンバー	河野 哲也	文	教育	人文学
	和田 亨	理	化	自然科学
	關 智一	済	会	社会科学
	西山 志保	社	社	社会科学
	石渡 貴之	福	ス	スポーツ人間科学

全カリサポーター

	氏名	所属		グループ※2
学部選出	小山 太一	文	文	人文学
	安藤 道人	済	済	社会科学
	森本 正和	理	化	自然科学
	石井 香世子	社	現	社会科学
	原田 一明	法	法	社会科学
	高岡 文章	観	交	社会科学
	空閑 厚樹	福	コ政	社会科学
	岡本 紀明	営	国営	社会科学
	大山 載吉	現	映	人文学
	黒岩 三恵	異	異	人文学
総長任命	石坂 浩一	異	異	社会科学
	大石 和男	福	ス	スポーツ人間科学

※2 サポートグループ
- 人文学系サポートグループ
- 社会科学系サポートグループ
- 自然科学系サポートグループ
- スポーツ人間科学系サポートグループ

全カリニュースレター No.46
発行 2019.10.10
発行人 井川 充雄
編集人 松山 伸一、石川 文也、中川 理
発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター